

1. リハビリテーション病院入院中の切断患者へのチームアプローチ ～心理的支援に焦点をあてて～

看護部 3階東病棟 細田文雄、廣田早苗

【目的】リハビリテーションチームにおいて多職種が、入院中に、義肢を使用している切断患者の訓練・生活過程で生じている不安や困りごとに対して、入院中にどのような心理的支援を実践しているのかを明らかにし、多職種で包括的かつ効果的なチームアプローチにより、リハビリ病院における心理支援の質の向上の一助とすることを目的とする。

【研究方法】経験年数5年以上で切断患者を担当した、看護師3名、理学療法士4名、作業療法士3名、義肢装具士2名、臨床心理士2名、医療ソーシャルワーカー2名の計16名を対象とした。令和2年12月7日～令和3年6月30日に、対象者1名に対し研究者2名で14分～30分程度半構造化インタビューを行い、逐語録をコード化しカテゴリーを作成した。

【倫理的配慮】当センターの倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者には本研究の主旨を文書と口頭で説明し、同意書に署名を得た。

【結果】心理的支援に焦点をあてた切断患者へのチームアプローチとして、302のコードから19の職種統合サブカテゴリーと4つのカテゴリーを抽出した。〈ボディーイメージのギャップや義肢使用の受け止め方を理解する〉では、リハビリスタッフは受け入れざるを得ない現実に直面している患者に思いを働かせることや、切断患者の能力と医療者間のギャップを感じ取っていた。

〈ニーズや身体状況に応じた訓練になるよう認知に働きかける〉では、リハビリスタッフは身体症状の対応の他、患者の希望を聞きながら、義肢使用のイメージづけや気づきを促す事を段階的に試みながら自信を持たせるように働きかけていた。〈不安なく生活できるよう退院後の具体的な生活環境を整える〉では、リハビリスタッフは切断患者の退院後の生活環境などを調整し、生活イメージを明確にしていた。〈問題解決に導くため他職種と連携する〉では、リハビリスタッフは情報共有や相談をするなど、他部門の専門性を尊重しながら支援の方向性を共有していた。

【考察】切断患者に関して、渡辺は「彼らは“欲求の高まり→その断念や置き換え”という途上で、失意、憤り、不満、羨望、抑うつなどの情緒を体験する」¹⁾と述べている。リハビリテーションの経過で変化する患者の思いやニーズを受け止め、訓練士は訓練や義肢使用にてボディーイメージの再獲得や自己実現を促し、看護師は訓練が継続できるよう皮膚障害や幻肢痛、患者の思いに細かく対応するなど、各々の専門性を持って患者介入し支援を行っていた。また、それぞれの部門でしか見えない患者の状況があるため、看護師は、病棟での切断患者の様子を多角的に捉え、リハビリスタッフと情報共有を行い、細やかに対応することで、患者支援のための統一したチームアプローチができると考える。

¹⁾ 渡辺俊之：切断患者の障害受容，総合リハ 22 巻 10 号，837 - 841，1994